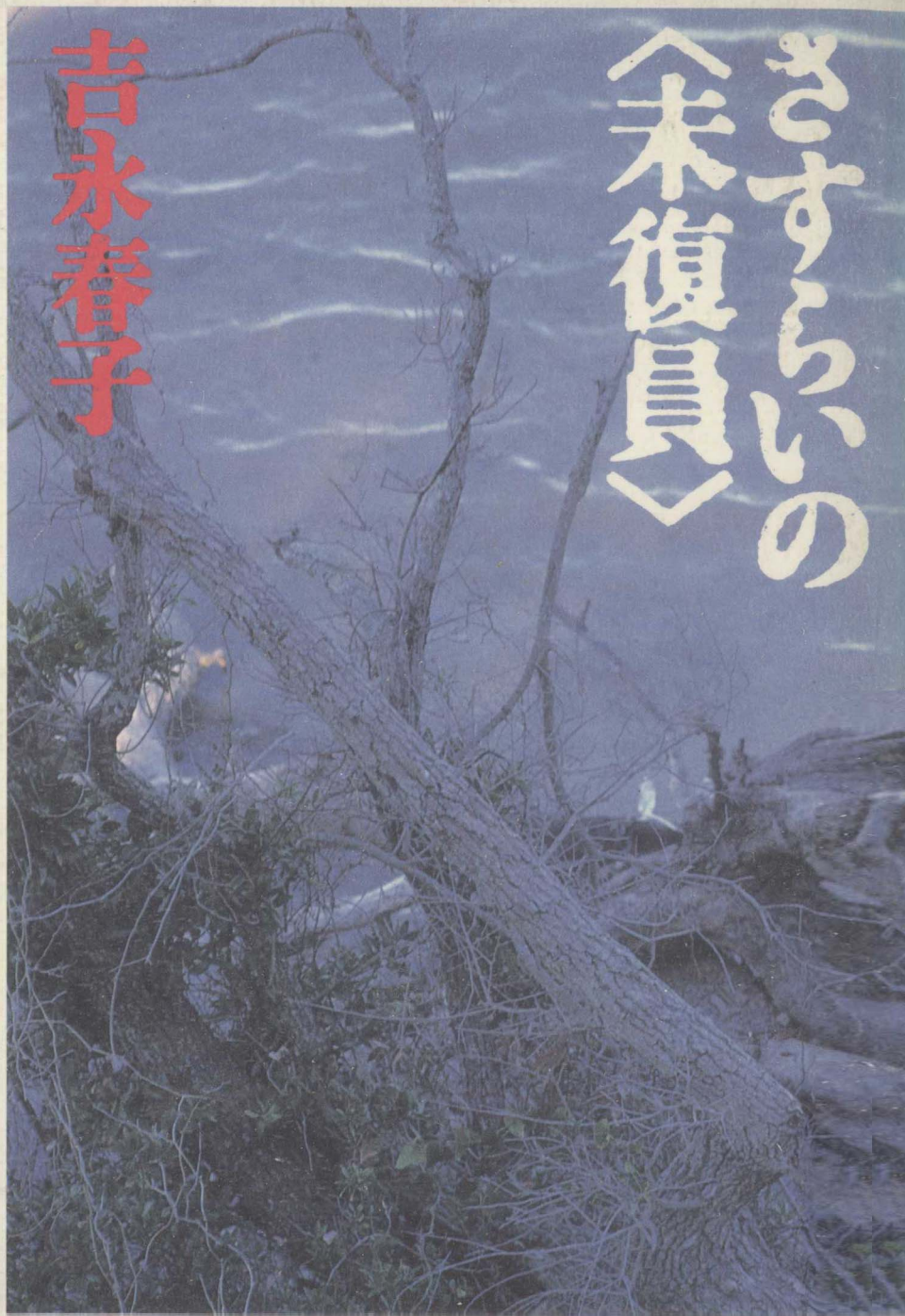


さすらいの
〈未復員〉

吉永春子



吉永春子

さすらいの
〈未復員〉

筑摩書房

吉永春子（よしなが・はるこ）

TBSテレビ・プロデューサー。広島県三原市生まれ。1955年、早稲田大学教育学部卒業後、ラジオ東京（現TBS）に入社。報道ドキュメンタリー部門で、「土曜ドキュメント・キャバレー」をはじめ、「さすらいの未復員」「魔の七三一部隊」など、数々の話題作を手がける。報道制作部長を経て、現在、社会情報局専門職次長。著書に『ドキュメント・ガンからの生還』（新潮文庫）がある。

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

さすらいの〈未復員〉	一九八七年七月二〇日 第一刷発行	著者 吉永春子	発行者 関根栄郷	印刷 多田印刷 製本 積信堂 発行所 筑摩書房 東京都神田小川町二ノ八 振替東京六一四一二三 電話東京 三二一七六三（営業） 三二四一七二（編集）
------------	------------------	---------	----------	---

もくじ

プロローグ 〈未復員〉との出逢い 7

〈未復員〉 PART・I — 1970

置き去りにされた兵士たち

21

ロケハンティング 23

撮影開始 26

家族さがし 35

セピア色のカルテ 39

主人公は決まった 47

故郷へ 60

「不在」の兄 66

夕べの徘徊 76

「天皇陛下の為に」 80

正面からの撮影 85

テレビ放映の日 89

〈未復員〉 PART・II 1971

不変の夏

93

夜行列車 95

失意の再会 97

家族への虚勢 109

「ラバウル小唄」 118

言葉を失った元兵士 120

映画鑑賞 124

アパート生活 131

戦場のシヨック 136

“精神障害”への差別 141

すり抜ける日本魂 145

〈未復員〉 PART・Ⅲ 1984

御奉公願い下げ

151

十三年目の夏 153

シニカルな笑い 162

“不在の人” 164

「死んだ人が愛^{いと}しい」 166

今、二十九歳 171

望郷の日々 182

上官への距離 187

快適と不自由の間 194

夜の別れ 201

心の傷痕 211

追跡調査 215

“日本魂” 217

老いゆく〈未復員〉 226

「定年退職」 236

エピソード 新たな旅立ち 240

さすらいのへ未復員◇

装幀・カバー写真
加藤光太郎

ブローグ 〈未復員〉 との出会い

〈未復員〉と呼ばれる人に私が出逢ったのは、全く偶然のことだった。

一九七〇年の春。

TBS報道局の片隅で、私は無愛想な黒の電話を前にして、さっきからウロウロしていた。

——電話のダイヤルを回そうか……、それともきっぱりと止めるか……。

やっと長年の念願がかない、テレビのドキュメンタリー番組のチームに入ったばかりの私だったが、電話をかける事には慣れていた。ニュース取材や、ラジオの録音構成などで、それまでに毎日、十本以上の電話をかけまくっていた。

考えたあげく、思いきってかけた一本の電話から、スクープの真似事のようなこともあった

し、また逆に、受話器を放り出したくなるくらい不愉快な思いをさせられた電話もあった。相手の姿が見えないだけ、不快さは後をひき、砂をかむようなみじめな思いをする事もあった。そんな思いをしても、電話をかける前の、期待と怖れのいり交じった緊張感は、どちらかというと好きな方だった。

——まだ見ぬ人と、ドラマが始まる——

三分間のニュースでも、三時間のドキュメンタリーでも同じだ。そう思っていた。やっとダイヤルを回し始めたのは、ニュースの時間が終り、大部屋が、閑散とし始めた時だった。

「もしもし、国立武蔵療養所ですか……」

私は、東京近郊の国立の精神・神経科の療養所のS医師を呼び出した。一、二分後、S医師の声が聞えてきた。

「私、Sですが、どちら様ですか？」

「突然お電話をしてすみません。私、TBSの吉永と申します」

受話器の向こうで、微かに息をのむ気配がした。

「何の用でしょう……」

「一度、番組の企画のことでお逢いしたいのですが……」

数秒間、沈黙が続いた。「駄目かなあ……」と思いつつ、その空白に私は賭けた。

「明後日の昼、こちらにいらして下さい」

電話が切れた後も、私は気が抜けたように、受話器に手をおいたままだった。

S 医師は、私に逢いたくなかったのではないか……。

何故なら、私にいい感情を持っていないはずだから……。

いや、私は彼等のスキャンダルめいた事を放送した事があるから……。

私は胸の中でつぶやいていた。

S 医師は、六〇年安保の頃、学生運動の主役の一人だった。ブンド（共産主義者同盟）の理論的指導者であった彼は、学生達の間でもカリスマ的存在であった。私の同僚の一人などは、彼に心酔し、「天才だ！」と熱病にかかったようにほめたたえていた。

その六〇年安保闘争の直後、私は一つの録音ルポルタージュを作った。タイトルは、「ゆがんだ青春」。

その内容は、当時の全学連の唐牛健太郎委員長が、右翼の黒幕といわれる田中清玄氏から、多額の資金援助を得ているという、スキャンダルを扱ったものだった。僅か三十分の番組だったが、放送直後から電話が鳴り始め、大きな波紋をまきおこした。翌日から、マスコミに追いかけられ、私の身边も公安関係者が調査しているという噂が流れた。

この放送について、S 医師がどう考えているのか……。私自身、S 医師とは一度も逢った事がなかったのである。

二日後、私は東京近郊の小平市に社の車を走らせた。玉川上水沿いの桜並木の花は、既に散り終り、萌黄色の季節が息づき始めていた。

約束の時間の十分前に車は国立武蔵療養所（一九八六年十月、国立精神・神経センター武蔵病院と改称）の正面ゲートをくぐった。正面玄関で車を降り、外来の待合室に急ぐ。時間は十分にある。

外来待合室のベンチに腰をかけながら、私は身を固くしていた。精神・神経科専門の病院を訪れたのは、初めてだった。正午を過ぎると、患者らしき人影も見えなくなった。十二時十分……。待合室は私一人になってしまった。

私はぼんやりと足許をみつめていた。けだるい午後の陽ざしが差しこみ、私の足許に陽炎のような影を落とす。爪先でそのゆらゆらと動く陽ざしを追っている内に、急に、不安な気持ちになってきた。……ひょっとして、彼の都合が悪くなったのではないか……。時計をのぞくと、十二時半。電話でも……と立ち上ったその時、白衣が私の目前にひるがえった。

「Sです」

髪をかきあげながら、Sさんは、軽く頭を下げた。

「腹が減ってるんです。めしでも食べませんか」

彼はさっさと、白衣の裾をひきずるようにしながら歩き始めた。私は黙ったまま後を追った。長い廊下を渡り、建物の外に出た。広い芝生の庭を横切ると、団地のような建物がそびえていた。それは療養所に勤務する職員の官舎だった。

「どうぞ……」

S 医師は、自宅のドアを開けながら、初めて私に視線をあてたのだった。

S 医師の書齋と思われる和室に通されると、小柄な夫人が次々と食事を運んで来られた。冷奴、焼魚、シュウマイ、サラダ……、昼食にしてはかなりボリュームがある。S 医師は私に食事をすすめながら、待ちかねたように御飯を口いっぱいにはおぼった。

簡単な自己紹介をした後、私は訪ねた目的について話し始めた。

「今年の夏、いわゆる終戦関連の特別企画番組を考えている。が、特に戦争にこだわってはいない。私とすれば、一九六〇年のいわゆる六〇年安保から、十年たった今、現在について、何か番組が出来ないか考えている」

ボソボソと説明しながら、（我ながら要領を得ないな）と頭の片隅で考えていた。

「私に逢いに来た目的は、本当は何ですか……」

突然、頭の上に癪癪玉かんしやくたまが破裂したような声が落ちてきた。

「まずったな……」

そう思いつつも、反射的に私は答えた。

「Sさんを中心において、ドキュメンタリー番組を作ってみたいのですが……」

口から出まかせの発言ではなかった。苛立ったSさんの顔を見ているうちに、彼の心の奥に突っこんでみたいという気持ちにかられたのだった。

「駄目です。本当に駄目です」

S 医師は強く首を横にふった。

「第一、何を撮りたいのですか。僕なんか取材したって、面白くもない。終戦企画とするならば、もっといいテーマがあるでしょうに。僕なんかより、もっと他に……」

顔をそむけながら、S 医師はちよつと考えこんだ。

「例えば……例えば……、この療養所に、〈未復員〉と呼ばれる人がいるんです。知っていますか？」

「いいえ」

「〈未復員〉——未だ復員せざる人と書きますが、いわゆる南方等にいる未帰還兵とは、違います。この人達は、戦争中、精神障害をおこした元兵士達です。今でも戦争体験が頭から離れない……。白衣の医師を見ると、『軍医殿！』と敬礼をする元兵士の人もいます。また、毎朝、軍人勅諭を朗読する患者さんもいる……。僕もここに来て、その存在を初めて知った時、本当に驚いてしまった」

話を聞きながら、私の胸を「閃光」が火花を散らしながらよぎっていった。

「このネタはいけるぞ！」

久しぶりに私の胸はおどった。

終戦番組の企画会議をやる度に、「終戦風化論」がいつとはなしに、幅をきかせるようにな

つてきた。

——今更、戦争中の事なんて、もういいじゃあないですか。

若い人だけでなく、いい年をした年配者も、それにおもねるかのように同調する。

そんなものかと思いつつ、あれだけ大きな殺戮^{さつりく}を繰り広げ、底知れぬ犠牲者を出しながらも、戦争の全貌は未だに明らかにされてはいない。それなのに簡単に風化^{ふうか}させていいのか……と自分にいいきかせてはきたが、そうはいっても、なかなかこの『風化論』を押さえこめるような新鮮な素材はみつからなかった。

何年もその思いでイライラして来ただけに、突如とびこんできた「未復員」の話は、直観的に火花となって閃^{ひらめ}いたのだ。

自分でも次第に顔が紅潮してくるのが分ったが、私はまるで、「未復員」の言葉が聞えなかったかのように話をもとに戻した。

三十分雑談をした後、S医師の午後の勤務時間がやってきた。私は席をたちながら、さりげなく切り出した。

「「未復員」の方の取材というのは、出来るのでしょうかねえ……」

「うーん。難しいかもしれませんねえ」

「その件で、また連絡してもよろしいでしょうか……」

「どうぞ……」

Sさんの声に送られながら、私は彼の自宅を去った。外には、甘い春の空気がたちこめてい

る。不安とはずむような想いを胸に秘めながら、私はその外気に身をゆだねたのだった。

「バーン」

はじけるような銃声と共に、若い男の体が宙に浮き、くずれるように倒れた。

「あーっ！」

テレビの中継を見ていた報道部員から、どよめきが起きた。

朝から、瀬戸内海の観光船をシー・ジャックしていた犯人が、遂に警官のライフル銃で撃たれた瞬間の映像だった。

この年、日航機「よど」号の乗っ取り事件以来、人質監禁事件が、たて続けにおきていた。やや見慣れた人質事件とはいえ、この「犯人狙撃」の生々しい映像に、私は声をのんだ。

西部劇の時代でもあるまいし、こんな映像が日常的に茶の間に入りこんだら、どんな事になるのだろう……。

シー・ジャック事件の中継は終り、人影はまばらになっていた。

「ちよっと、お茶でも……」

プロデューサーの松橋さんが、私の肩を軽くたたいた。

三階にある喫茶ロビー。通称、「三ロビ」は、いつでも混雑していた。やっと窓際の隅に空席をみつけれ落ちて着いたものの、さっきの「射殺」のニュースが嘘のように、有名歌手と俳優の声でにぎわっている。テレビ局のもう一つの世界が、いつもと同じようにざわめいていた。